私の映画手帖

〈VII〉

カーテンを上げよう

淀川　長治
〈映画評論家〉

一九五二年にロサンゼルスでモンテカルロ・バレエ団の「白鳥の湖」と「スペイン狂想曲」を見た。アレクサンドラ・ダニーロワが実に美しかった。劇場がはねてからも私は一時間ちかく劇場の裏通りに立ちつくし、ぼんやりとバレエのこうふんに酔った赤い頬を夜風に冷やしていた。そこへ大きな楽器のケースを抱えた老人が通りかかったので『すばらしい舞台！』と呼びかけてしまった。するとその老人は『なあに今夜なんか、だらけちゃっていましたよ。これでも僕はアンナ・パブロワの伴奏をやっていたんですからね』とさびしげな顔をした。

パブロワは神戸の聚楽館で見た。大正十一年だった。バレエはそのときから私の胸にしみこんでいる。神戸の松竹座ではドイツのノイエ・タンツ（モダン・ダンス）のハラルド・クロイツベルクとルース・ページを。これは昭和九年だった。この年に同じく松竹座でアレキサンドル・サカロフと夫人のクロチルドの「庭の少女」「奇妙なブーレ」などを見て感激した。聚楽館では大正十四年にデニショウン舞踊団も見た。

映画はトーキーとなるとサドラー・ウェルで舞踊団のモイラ・シャーラーとロバート・ヘルプマン、レオニード・マシーンの「赤い靴」「ホフマン物語」「やがてマーゴット・フォンティンの「ロイヤル・バレエ」これには（火の鳥）（オンディーヌ）（白鳥の湖）がおさめられていた。

舞台に映画に私はダンスに夢中になった。そして最近ではヌレエフの「バレンチノ」あるいは「愛と喝采の日々」さらに少年少女たちのバレエ学校を舞台とした劇映画もちかくやってくるはずである。トーキーとなったその初めのころアグネス・デミルの「バレエ学校」（短篇）でバレエ教師がアン・ドゥ・トロワ・キャトルと床を足で叩いて生徒にレッスンをさせている風景が目にしみた。

ところで一九七一年の七月にロイヤル・バレエ団の「ピーターラビットとなかまたち」がニューヨークで封切られていると知って私はこの映画だけを見るためにでもニューヨークへ行きたくなったほどである。

その映画が……ついに輸入されたのである。これは四月三十日午後四時三〇分から一時間番組としてNHKから放送されたので、あるいはごらんになっているかとも思う。

イギリスの、ベアトリックス・ポッターが一九〇二年から数年のあいだ描きつづけた動物の絵物語のバレエ化である。日本にも可愛いい絵本になって福音館書店から発刊されている。

NHKの放送は一時間番組だったのでブタの家族の部分がカットされてしまったがこのブタの息子（アレキサンダー・グラント）が巧い。実に楽しく愉快なのだ。日本では岸田今日子さんが語り手となっているがオリジナルは全部パントマイムで台詞はない。

洗濯好きのはりねずみ（フレデリック・アシュトン）。

〈右上〉かえるのジェレミー
〈右下〉ねずみたちの群舞
〈 上 〉ピーター・ラビット
〈左上〉ねずみの夫婦
〈左下〉ブタの一家
映画「ピーターラビットとなかまたち」より

あひるの奥さん（アン・ハワード）、キツネの紳士（ロバート・ミード）、かえるのジェレミー（マイクル・コールマン）、このほかリス、ネズミ、猫、フクロ、いろんな動物たちが見事な踊りを見せ、ピーターラビット（豚を演じたアレキサンダー・グラントの二役）が草や木の影からそれを見つめている。

衣装がいい。顔は動物のマスクこれが凄い。実に見事なマスク。マスクだから笑いも泣きもびっくりまなこもしない。文楽人形と同じだ。それが全身の躍動で感情をあふらせる。

あひるが卵を生む場所をさがしていると木の蔭でキツネが新聞を読みながらジーッとそれを見つめている。キツネが読んでいる新聞の記事は（あひるの料理）。あきれるほど巧いのが蛙のジェレミー。

雨が降りだして大喜びでレインコートを着て池にマス釣りにゆくその動きそのダンスの巧みさにあきれるばかりだ。

その衣裳と色彩の良さ。ベアトリックス・ポッターが一九〇二年（明治三十五年）というころに描いた動物画の絵ものがたり、そのためこのバレエの舞台（実景も加えて）はいかにもイギリスの時代色が匂い、明治の絵本を見るクラシック美術があふれながら、しかもモダン・バレエの手ごたえが全篇に躍動する。

ロイヤル・バレエ団の振付を受けもつフレデリック・アシュトン自身演じる（はりねずみのおばさん）同じくロイヤル・バレエ最古参者のアン・ハワードの（あひる）はいうまでもないが蛙のマイクル・コールマンが圧巻だ。ダンスとはこれバレエとはこれ、その至芸を見せた。この映画、三年がかりで完成したという。東京では七月いっぱい渋谷のパルコで上映するが神戸でもぜひ上映してほしい。

かかる美術映画が日本の封切館に出ないということは不思議なことである。

女体百景

〈71〉 躁鬱の女

細川　董（ただす）〈文とえ／哲学者〉

「したい！したい！浮気がしたい！」
「そんなにしたいの？」
「したいんだなあ。最近ほんとに浮気をしてないんだなあ」
「誰か世話したげよか」
「いや、あなたで充分ですよ」
「私で？」
「そうそう、あなたで充分」
「ほな、ちょっと待って。
今度の選挙に当選したらさしたげる」
「それほんとなの？」
「ほんとよ」
「よーし」
「だけど前からいってるお店出させて下さる？」
「うーん、いとやすいこと。選挙に当選したら、あなたのお店の一軒や二軒、いとおやすいことでございます。その代り、浮気の相手の方間違いなくたのみますよ」
「OK」
「よーし、これできまった」
「よっしゃ。きまった。指切りげんまん！」
「指切りげんまん！」
「先生に証人になってもろとこ」
「証人でもなんでも」
こういいながら、彼女は選挙前の彼と固い固い指切りげんまんを私の目の前でした。

私はその保証人にならされた訳である。
しかし、そんなことは酒席のざれごと、遊びというまでもなく私は忘れてしまっていた。彼も忘れた。
やがて、選挙が始まり、彼は当選した。
そして、彼女だけはあの夜の固い固い指び切りげんまんをおぼえていたのである。
彼女から電話があって
「彼、危なかったけど、当選したわね。あの約束覚えてるかな」
こういわれて私は、あの夜の指び切りを思い出した。
「そうそう、あの約束実行したらなあかんで」
と、ひやかし半分にいうと
「低空飛行で当選したんやから、ちょっと手心加えなあかんわ」
と彼女はやはり本気の様子だ。
「手心加えてどないするね？」
と私が聞くと、彼女は
「そんなん……ハ……」
と笑いにまぎらわしてしまった。
本気ともうそ気ともとれた。
しかし彼女は実は本気だったのだ。
彼女はそのクラブでは普段、人一倍特に陽気で客あつかいのうまさでは抜群の人気者だった。ママさんにも特に可愛がられていた。
ソフィア・ローレンのような強気女のマスクも、その

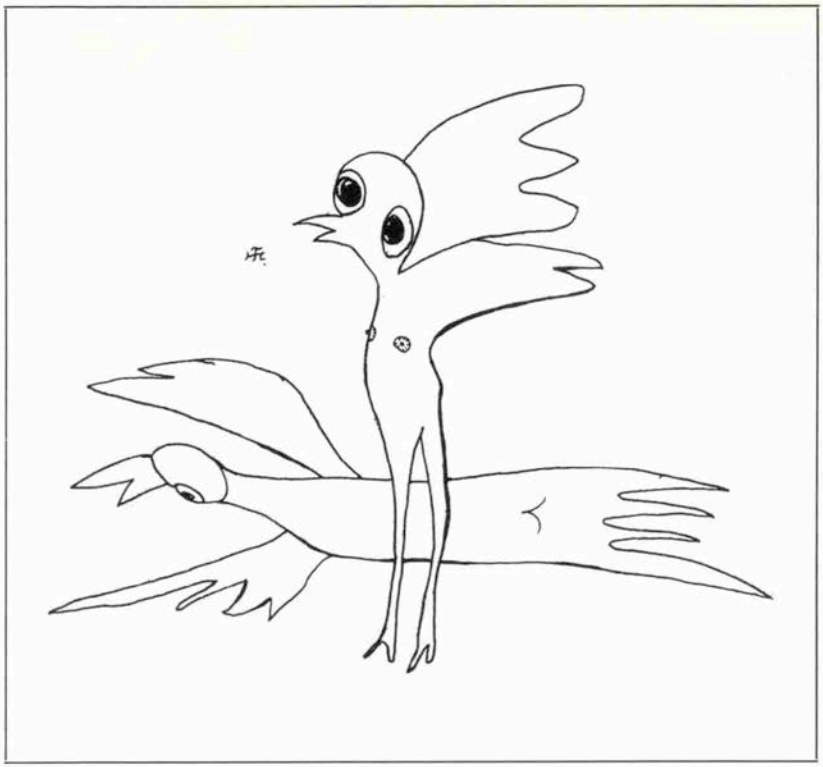
男気とマッチして、彼女が一人いることで、そのにぎやかさはしずかなホステス十人分には匹敵した。

とうとう彼女は彼に電話した。選挙が終わったのに一向に彼が現われないからである。

「当選祝いしたげよ思てるのに全然一遍も来ないやないの？何よ！」

「いやごめんごめん。一度は飲みあかしたんじゃなかったかなあ？　当選してから」

「あほなこといわんといて！　誰と間違てるねん？まだ私とは当選してから一遍も飲んでへんやないの。



当選したらえろなって顔も見せへんいうんか？

ええかげんにせなあかんで。先生も交えて一遍三人で飲もよ」

彼女は保証人の私をひきあいに出して、約束いや、公約の実行を当選後の彼にせまったつもりであった。

彼はわざわざ東京から神戸へやって来た。彼女のクラブへ。

彼女は彼の公約を信じてお相手をしたのである。彼女の公約を実行した訳だ。

どの程度、手心を加えたかは私は知らない。

しかし、彼の方は、さすれば政治家、彼の公約を実行しなかったのである。

その後、あんまり彼女から連絡がないので不思議に思い私は電話してみた。

「もしもし、元気？」

「えーえ。ワーターシーゲーンーキーヨー！」

何と力なく消え入りそうな彼女の声であることか。

あの普段の元気な力強い声の彼女はどこへ行ったのだろう。電話の向う側でしゃべっている彼女は全く別人のようだ。信じられない。

私は背すじが寒くなって来るようなあの電話の声を想い出すと、こわくなって、まだ彼女によう会わないでいる。

★床も天井も八角形
緑いっぱいの喫茶店

さーすが青谷、と思わせる喫茶店「青谷コテッジ」は八方に窓のある八角形の建物。壁は白と緑、窓の外は白い光と山の緑。そして柱が真中に一本あるだけだからとても広々している。

八角形の白い建て物です

或る晴れた昼下がり、可愛い女子大生に直撃インタヴューをしてみると「学校から近いし明るいしとっても素敵」。アートフラワーと可愛いお人形が出迎えてくれる店だから近くの海星松陰の学生さんたちの評判になりそう。そして可愛い女学生に憧れる男性たちにも評判になりそうだ。

青谷コテッジ／労災病院山側
☎222－5378

★サテンドール東京店
銀座にオープン

生田区中山手のジャズクラブ「サテンドール」（☎242－0100）のオーナー、井上修一さんは、東京・銀座七丁目にユニークな串カツの店「梁山泊」を営業していたが、去る5月23日から同店をジャズハウス「サテンドール」に模様替え。神戸店同様に低料金で、ジャズが流れる店としてスタートしたが、これによって「東京のジャズ情報をいち早く神戸に送り届けることができる」と話す井上さん。神戸のジャズファンにとっても嬉しい話です。

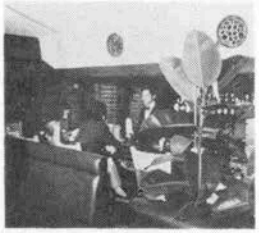
オープニングには500人ものお客さまが

サテンドール＝東京都中央区銀座7丁目　ニューコンパルビルB1
☎03－573－4877日祭休み

★芦屋にチェックOPEN

宝塚、夙川と郊外のレストランとしてお馴染みカフェ・レストランチェックが芦屋にオープンした。芦屋川の東沿い、南仏風白亜の瀟洒な3階建てのビルパレ・エレガンスの2階。窓の外は芦屋川の桜の緑、道歩く人はハイ・ファッションと窓から外を眺めているだけでも楽しい芦屋の街だ。

嬉しいことにザ・チェック芦屋店はラウンジコーナーもある。つまり、お酒も飲めるということ。ピアノなんぞも置いてあって、「また芦屋にプレイスポット誕生！」と芦屋っ子の喜ぶことしきりのようだ。


ザ・チェック芦屋店のラウンジ

カティサークキープ　7000円
阪急芦屋川駅南パレ・エレガンス2F　☎079－32－6070

●神戸うまいもんとドリンキング

セント・ジョージジャパン

北野町一丁目130
☎242－1134

北野町で「エキゾティックなクラブライフ」をテーマに5年目を迎えたセントジョージジャパン広いフレンチ窓を通しての神戸の夜景にも、すっかりお馴染みでしょう。

5周年を記念して、7月5日はゴルフ大会。宝塚ゴルフクラブでは、上手も下手も混ざり合って楽しい1日でした。それだけじゃないですヨ！5周年記念「大船上パーティ」を只今受け付け中。港町ならの催しとみんな楽しみにしています。真夏の船上パーティなんて最高。会員以外の参加も受け付け中です。

この玄関も北野町名所の1つに

お問い合わせはセントジョージまで。会費1万円。

今宵の花世には坂下歯科の坂下先生を囲んで気心の知れた仕事仲間が集まりました。神経を使ったあとの一杯は、心地よい酔いに誘ってくれます。

左より森先生、ママ、木村先生、山根さん（看護婦）、坂下院長、榎本さん（看護婦）、フーちゃん、楠山先生、大隅さん（看護婦）、糸谷さん（長谷川工務店勤務）のみなさんです。

花世

古川　和枝

神戸市生田区中山手通1丁目74

荒神ビル６Ｆ　☎391－4116

暑中お見舞い申しあげます

このほどさんプラザ店がオープンしました
本店同様よろしくお願いいたします

ヨーベ・三宮
ムサシ

●メニュー
とんかつ定食1,200円・えびしい茸定食800円・串かつ定食700円
とんかつ1,000円・えびしい茸600円・串かつ500円

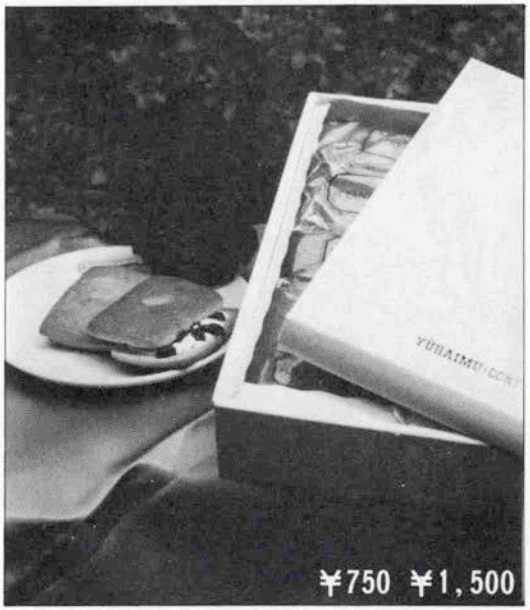
本　店
三宮・センター街　☎321－0634
11：00AM～7：30PM毎水曜日休み

さんプラザ店
三宮・さんプラザB1　☎391－2427
11：30AM～8：30PM第1・3月曜日休み

新発売

ROSEMONDE ロズモンド

高級ワイン
カリフォルニア産レーズン
甘みをおさえたクリームを
まろやかな手づくりのソフトサブレで
サンドしてみました



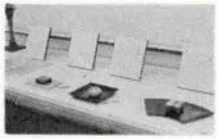
北欧の銘菓
ユーハイム・コンフェクト

■本社・工場・熊内店　神戸市灘区熊内町1－8（南蛮美術館東隣）TEL 221-1164
■三宮センター店・さんちか店・大丸・そごう・阪急・三越・神戸デパート・元町店

神戸百店会だより

★幻しのお菓子お目見え

5月25日から一週間大丸神戸店の「源氏の由可里展」に出品された源氏物語を形取った凧月堂の創作菓子60点は会場のお客様から感嘆の声がきかれる程に素晴らしいものでした。80周年記念に出版された「源氏の由可里」を見てぜひ味わってみたいと思っていた人たちも、6種類即売していたのに大喜び。ウィンドーに飾ってあるお菓子を思いをこめて説明して下さる吉川冬季子副社長が印象的でした。



右はみごとな源氏の菓子
上はお菓子を前に吉川副社長

★とんかつ「むさし」がさんプラザB1にオープン

とんかつの老舗「むさし」（三宮センター街）のさんプラザ店がオープンした。

「むさし」さんプラザ店

黒塗りの粋な格子戸をくぐると、上品な和風づくりのお店。椅子席は14人、カウンター席は10人が座れる。

この店の〝名物〟はといえば店長の川飛さん自身が老案した「えびしい茸」。これは、えびのすり身とシい茸とを揚げたものだが、口ざわりが良く、あっさりとしていて、特に若い女性に大いに受けそうだ。これは本店にもない新しいメニューで、お奨め品とのこと。

とんかつ定食1200円、串かつ定食1000円、えびしい茸定食8000円、串かつ定食7000円、とんかつ1000円、えびしい茸600円、串かつ500円、お酒ビール各300円。

11・30AM～8・30PM

第1・3月曜日休み

さんプラザ店☎391―2427

センター街店☎321―0634

★ジャルダンが神戸っ子サンバチームに協賛

神戸まつりパレードに2年ぶりに参加した神戸っ子サンバチーム。今年のフロートのスポンサーは**菊水総本店**の喫茶部**ジャルダン**です。今年はブラジル移民70周年とあってVIVA・BRAZILをタイトルに手作りで色とりどりに大小20匹の蝶々がフロートを飾るといった豪華なもの。阪本完二、チャーリーの率いるバンドが賑やかにサンバを演奏し、パレードの雰囲気を盛りたてていた。

神戸っ子のティールームジャルダン

●ショップトピックス

★センター街に金券ができましたとえばお中元なんかに最適でしょう。老舗のそろったお店のお買物御贈答に是非どうぞ。

★ベル・ジュパンスって御存知？新しい髪のお洒落。パーマも決って髪を痛めないし、トリートメントも今までより簡単。**エリザベス美容室**でお訪ね下さい。

★**あこや亭**が本を出しました。もう3冊目ですが名前は「しずる」。カラー頁も多い「神戸っ子」もたじたじちゃう程の豪華版です。お問い合わせはお近くのあこや亭に。

★キャンディキャンディのプールが大評判、というのはおもちゃの**カメヤ**のハナシ。子供用プールですが、結構深くって小学校低学年までは十分使えます。プールの底に今人気のキャンディキャンディが微笑みかけているんです。

★キミ、もうボーナス出たかな。お金って不思議なもので使うともうすぐ失くなっちゃう。今年こそためてみませんか？。**太陽神戸銀行**では皆様の御利用をお待ちしています。

★7月14日はパリ祭。**ブラン・ドゥ・ブラン**では恒例のパリ祭スペシャルディナーをご用意しております。7月12日から14日までの3日間、午後5時から10時まで。お食事、税、サービス込みで600円です。今、前売券発売中です☎321―1455

★**ニューポートホテル**よりディナー券プレゼントのお知らせ。

15階回転レストラン「鳴門」のディナー券を抽選により2名の方に差し上げます。御希望の方は7月25日迄に電話番号を明記の上「神戸っ子ディナー券係」までお申し込み下さい。

〒650　生田区東町113―1大神ビル7F　月刊神戸っ子編集部

ポケットジャーナル

★深まるリガ市との友好

神戸市がソ連邦ラトビア共和国の首都リガ市と姉妹都市提携を結んだのは昭和49年6月のことだが、6月1日から6日まで、さんちか広場と同ギャラリーで「リガ展」が開かれた。

1日朝、メチスラワ・ドウブラ・リガ市長と宮崎辰雄神戸市長の手でテープカットが行われ、リガ市の現状が多数のパネル写真や展示品などによって神戸市民に披露された。

リガ市はバルト海に面する港都で、面積3万ヘクタール、人口83万人。8百年

挨拶をするドゥブラ・リガ市長（左）

の歴史をもち、今日では工業都市として発展、会場にも展示された各種機械、ディーゼル、電子機器などが生産されている。

また、3日には神戸文化大ホールで同市のアマチュア合唱団「アベ・ソル」のコンサートが催された。

★ハイセンスな あなたの作品を募集中

「コウベ・ファッションデザイン・コンテスト'78」（主催・神戸市・神戸商工会議所・神戸新聞社）の作品応募要項が決定した。

昨年の神戸大賞受賞作品

＜応募区分＞①ハイファッションの部／婦人・子供服の秋冬物で、神戸のファッションをクリエートするハイセンスなオリジナル作品応募資格は神戸市をはじめ全国。②マイファッションの部／婦人・子供服の秋冬物で、神戸の日常生活から生まれたホームメイドの作品。応募資格は神戸市内在動・在住者のみ。

＜応募方法＞いずれも①未発表のオリジナルデザイン画②デザイン画はB4サイズの画用紙一枚に一点（各区分ごとに一人3点以内）

＜応募締切日＞7月8日（土）必着

＜審査＞第一次／7月13日（木）最終／8月19日（土）

＜作品発表＞8月下旬神戸新聞紙上

＜入賞＞①ハイファッションの部／神戸ハイファッション大賞（一名）賞金30万円ほか。他に金、銀銅各賞。②マイファッションの部／神戸マイファッション（5名）3万円相当の靴またはハンドバック引換券。努力賞10名以内。

＜審査員＞①ハイファッションの部／小川楨、小池力彦、福富芳美細川数夫、水野正夫、山田富紗子マイファッションの部／中西省伍坂野惇子ほか。

詳細は神戸市経済局（33）—1013へ

★'78市民夏季大学開催

神戸新聞社主催の夏季大学が今年も5日間各界から5人の講師を招いて実施される。

渡辺淳一さん

梅原　猛さん

7／14　渡辺淳一（作家）「安楽死」
7／20　梅原猛（京都市立芸術大学学長）「柿本人麿呂の歌」
7／26　樋口清之（国学院大学教授）「日本人の知恵」
7／27　早乙女貢（作家）「武士の生きざま死にざま」
7／28　伊東光晴（千葉大学教授）「市民のための経済」

場所／神戸文化ホール中ホール
時間／6：15PMより2時間

チケットはさんちか、大丸、文化ホール、新聞会館など各プレイガイドで発売中。全コース参加で1600円、1回400円（当日500円）

★洋上大学、中国へ

第八回兵庫県青年洋上大

誕生日ありがとう運動

市民の福祉講座にご参加を!!

あなたも参加しませんか。

市民参加の啓発に。

本運動が毎年夏に開催している「第六回市民の福祉講座」を次の要領で行ないます。

テーマ　地域社会に福祉の理解を広げよう

日時　七月三十日（日）九・〇〇～十七・〇〇

場所　北須磨教育センターと北須磨団地

定員　五十名

参加料　三百円　中・高生　百円

内容　基調提案
福祉訪問
小グループでの話し合い
福祉訪問について

北須磨団地を、本運動ボランティアと二人組で訪問し、アンケートをもとに話し合う。そしてみんなの中にある「福祉の心」を開眼したいと願っています。

申込み手続

手元の用紙に①氏名②住所③電話④職業を書き⑤参加料を添えて当運動本部まで

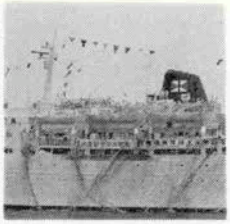
○詳細は、当運動本部までみなさんのご参加をお待ちしています。

誕生日ありがとう運動本部

551 神戸市葺合区御幸通八—一—六
神戸国際会館一階の郵便局の隣
電話　二五一—八一六一
内線三一六

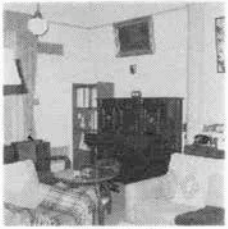
学の一行495名（沖縄県より10名参加）は6月8日正午、「コーラルプリンセス号」（英国客船・1万トン）で中国に向けて、第4突堤を元気に出港した。

今回の洋上大学は48年度、51年度に続いて3回めの中国一国だけの訪問。17日間船内研修の充実をはかりながら北京、上海、南京、揚州の四都市の実情を見学しスポーツ交歓などを通じて友好を深め、24日に帰港する。出港前のポートターミナルは色とりどりのテープが飛び見送りの家族らでいっぱい。若者らしい爽やかな船出風景だった。


元気に出発。洋上大学生たち

★待望久しかった小林邸がいよいよ公開

7月1日から北野町にある異人館「小林秀雄邸」が一般公開された。この建物は明治35年に英人建築家ハンセルによって建築されたもので、木造二階建ての中廊下をもつ典型的な箱型プランの家である。外壁は白く塗られ、現存する異人館のうちで最も美しいもののひとつであり、一般公開が待たれていた。


小林秀雄邸内部

公開は午前10時から午後5時までで、調度品なども一部をのぞいてそのままの形で残されている。期間は来年の3月31日まで。

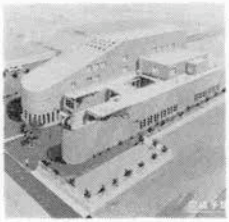
なお、「うろこの家」の一般公開は好評のため今年12月31日まで延長される。

また、7月1日から「小林邸」「うろこの家」にステキなガイド〝異人館ガール〟八名がお目見えした。これは神戸市経済局が一般募集をしたもので、白のタイトスカートとニットブラウスといういで立ちで異人館に彩りをそえることになる。

★尼崎に青少年の文化施設ピッコロシアター誕生

阪急塚口駅南西に尼崎青少年創造劇場（愛称ピッコロシアター）が8月16日オープンする。青少年の文化活動の場という目的のホールなので使用料も安いし、大ホール（400人）中ホール（200人）小ホール（100人）やリハーサル室、展示場と設備も整っているので、今からその活動が期待されている。

オープンの8月16日から23日までの1週間、オープニングフェスティバルと銘打ち昼、夜にわたってフォーク、邦舞、演劇、バレーなどのアマチュア団体が出演。オープニングの16日には地元のフォークグループ紙ふうせんの出演が予定されている。


ピッコロ劇場完成予想図

★アニメーションを楽しみませんか？

ファンタジーとロマンで年令を問わず人気のあるアニメーションを楽しもうという会が関西にも誕生した東映アニメーションファンクラブ（東京・会員3万人）の関西支部がそれだ。

原画やスチール写真の販売、映画上映会、映画スタ

おなじみサイボーグ009神戸では「平和の戦士は死なず」を上映

美術ガイド

★県立近代美術館
松岡映丘展 6／10～7／16
'78県展（公募展） 7／23～8／13

★西宮大谷記念美術館
館蔵作品展 6／18～7／30

★KCCギャラリー
甲南大学写真部新人展 7／2～7／8
'78アートグループ「線」展 7／23～7／29

★さんちか広場
さんちか篠山まつり 7／6～7／11
インテリアフェアー 7／13～7／18
ブラジル移民70周年記念ブラジルフェア 7／20～7／25
素人縁台囲碁将棋大会 7／27～8／1

★ギャラリーさんちか
いけ花から見た写真造形展 7／6～7／11
神戸芸術学校展 7／13～7／18
ブラジル70周年記念ブラジルフェア 7／20～7／25
東南アジア仏跡巡礼写真展 7／27～8／1

★新光ギャラリー
高麗粉引展 6／25～7／17
羽田勝遺作展 7／22～7／30

★トアロード画廊
白髪一雄個展 7／15～7／24

★ギャルリーあじさい
小林武夫個展 7／4～7／9

★芦屋ギャルリーりべるて
イブ・ガーニュ展 7／5～7／16

★そごう神戸店美術画廊
星囊一新作版画展 6／30～7／5
大徳寺黄梅院・小林太之茶掛展 7／7～7／12
第2回洋画秀作50選展 7／13～7／19
古刀から現代刀まで日本刀剣展 7／20～7／26
関野準一郎木版展 7／28～8／2

ジオ見学など、魅力的な活動が予定されている。まずは7月9日の映画上映会が活動のスタート。新開地神戸東映で、テレビの人気漫画「サイボーク009」「バビルⅡ世」など5本が上映される。(10：00AM～ 五百円)お問い合わせは(06)345－8651 東映アニメーションファンクラブまで

★生活に根を下ろした舞子焼を

神戸のやきもの舞子焼の復興に全力を傾ける南汎さんの作陶展が5月11日からさんちかで開催された。チャリティで色紙やカップを売る、しかも安価でという新しい試みもあり、氏の人格にふさわしい内容で会場は連日人気を呼んだ。舞子焼の、作風も一段と安定感を増し、今後の活躍が楽しみな作陶展だった。

色紙を書く南さん

★こどもの素直な心と表現を大事に育てたい

子どものことば、子どもの絵「なあにがみえる」はともに教師、保母として子どもたちの現場にいる東条安希子さん、坪谷令子さんの二人の女性の編による新しい子どもの本シリーズの第二巻。児童詩画集「晴れにはいつも――こどもその季節」は伊勢田史郎(詩人)の編による児童詩画集シリーズ第一集。ともに子どもの目と心を大事にあたためた良冊である。

現代のおとなたちが忘れ去ったこどもたちの心やさしい詩と真実を天衣無縫のこどもたちの絵とともに昏迷の世界へ送るというだけに思わず自分の眼を改めさせてくれるようだ。

せんせい
はよきてみ
おそらのくもが
やぶけようよ

＜なあにがみえる＞より

「なあにがみえる」童詩社 千円
「晴れにはいつも」月刊ペン社 千五百円

花時計

北野町界隈への期待

全国的に輪がひろがった風見鶏ブームは峠を越した感じがしないでもない。そんな時にまた、異人館倶楽部というファッションビルが誕生した。

ビルというのもピンとこない。ミニショッピングショップハウスがふさわしいかも知れない。

キングスコートとローズガーデンがオープンして話題をあつめ、引続いて北野アレーが開店し、そして異人館倶楽部の誕生となった。

これらのファッションハウスやガーデンの空間もレベルの高いファッションの店で連らなり、愛称として付けられた異人館通りも北野町の新しいイメージを創り出してきているのは喜ばしい限りだ。風見鶏ブームに乗っての北野町散策の人たちにはよい憩いの場となるだろう。

北野町界隈全体にイメージが高まりファッションエリアとして力をもつようになるにはまだまだ時間がかかるだろう。

その苦節の時が明日の神戸を創ることになる。

神戸の北野町の町衆の奮斗に心から期待を寄せている。

やはり、なんといっても北野町こそ神戸らしさの表徴なのである。

＜Y＞

●KOBE POST

★神戸っ子サンバチーム日本征服するか？

7月30、31日小浜まつりに招待出演、8月6日米子のがいなまつりにもまたまたゲスト出演スケジュールいっぱい有名タレント並みのこの頃です。

★知香流の成瀬香梅家元一行30名は、神戸新聞主催の〝花の使節〟としてモナコ、ヨーロッパ各地親善を終え5月25日帰国。6月11日生田神社会館で帰朝報告パーティが開かれ、宗家もお元気な姿で出席。

★朝比奈千足さんが、ベルリン、ドイツ国立歌劇場に主任指揮者オトマール・スイトナー氏の助手として昨春より勤務。5月20日帰国指揮者として7月21日大阪厚生年金会館で大フィルを指揮。本格的なデビューコンサートをする。

〒658神戸市東灘区岡本7丁目12ノ18 301号 **☎**(078)452－4279

★今年も恒例の文化人の集い〝8の会〟が小原流家元会館で、8月12日(土)に開かれます。今年で15年を迎えることになり新世代の文化人関係を中心にした〝7の会〟(仮称)を8月13日に開くという新企画もあって、下働人(**蘇本義一**、**塩谷芳彦**、**吉田稔郎**)は大多忙。

★第一勧業銀行の神戸支店長**吉川寛**さんが転任、**松本新**さんが神戸支店長に就任されました。

★KKペアーズ(**菊地吉弘**社長)の事務所が東洋ハイツより異人館倶楽部へ移転しました

〒650神戸市生田区北野町2丁目126 異人館倶楽部KKペアーズ **☎**078(222)1266

★歌手の**伊勢功一**さんが、大阪で〝マジック・キャッスル〟を開かれました。大阪市南区笠屋町13(第二山田ビル三階) **☎**06(213)5006・(211)6525

愛と人生を唄う

堀　郁子

CHANSON RECITAL

愛の讃歌
群衆
人生は過ぎゆく
イレーヌの店
人の気も知らないで
トワ（貴方）
インシャラー
芝居は終った
めぐり逢い
水に流して

巴　里　祭

7月14日(金)7:00PM

神戸文化ホール（中）

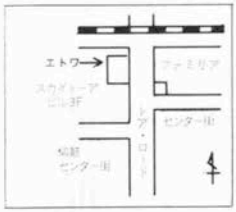
ゲスト
黄金のトランペッター
白井　克治

伊藤はじめ

演奏
吉川肇とニューダーリンズ＋1

前売券発売所
音楽の家エトワ　　さんちかプレイガイド
神戸文化ホールプレイガイド

お問い合せ
☎ 331−0813 ☎ 332−1755



プチシャンソン "音楽の家"

ET エトワ TOI

神戸トアロード/三宮センター街西入口　スカイトーアビル3F
TEL 332−1755　営業時間11：50AM〜11：50PM

堀郁子が
毎夕唄っております

□第二回神戸文学賞受賞作品

姥捨て

〈7〉

奥野忠昭
え・題字　犬童　徹

二階で大きな声がしたので、あわてて階段をかけ登った。

投げ出された黒い鞄、その上に汚れたノートと色鉛筆切れ端の紙、マンガの本。その真中に、穴を無数にあけたボール紙の箱。

「捨ててちょうだい」

「でも、これぼくのもんだよ」

息子はヒステリックに叫ぶ。声が高いのに、淋しく聞こえる。ぼくはまたわずらわしさがひとつ飛んできて、ぼくの肩にとまったことを直観する。だがぼくは前のように逃げはしない。糸がもつれればほぐすよりほか手はない。そのひとつひとつを処理することでぼくは自分の心を鍛えていくつもりなのだ。

涼子は顔を顰めている。眼と頬がくっつく。

「わたしきらいなの。虫を見るとぞっとするんだわ。なんだか湿っぽくって、いやなの。生理的に耐えられないわ」

「ぼくは好きなんだ」

息子は細長い黒い皮を被った虫を何十匹となく入っている箱を開いてみせた。

「かわいいだろう」

「ずっと飼っていたの」

涼子の腕や首筋に赤い斑点が出ていた。その無数の斑点から、小さな拒絶のざわめきが聞こえてくる。

「どうにか説得してよ」

「おばさん、虫が嫌いだって」

「でも、ぼくは大好きさ」

「ほかのものならなんでもいいから、ね、それだけはすててくれない」

「ぼく、ほかのものよりこれがいいな、だって、同じ種類のもの集めるのに苦労したんだから」

「そんなにいやなのかい」

「これ見てちょうだい」

赤い斑点が涼子の体内の毒素をすべて集めたように色づいている。

「痒くなってきたの。なんだか気持ちまで痒くなってきた」

「おばさんの部屋に飼うんじゃないからいいやろう」

「だめなの、家の中にいるってだけで」

息子は眼をつむって下をむく。

「わたし、日本で生まれたんじゃないから、小さいとき虫にひどいめにあったんだわ、きっと」

「子どもの部屋にでもかい」

「だめなのよ、わかってよ」

息子は口を風船玉のようにする。それをぎゅっと押し縮め眼をしかめる。こんなに不気嫌になることはめずらしいことだ。

涼子はさかんに躯をかきながら部屋から出ていった。

ぼくと息子は虫箱を前にしてお互を見つめあった。

「みんながいっしょに暮すんだから、他の人が嫌やがる

ものは飼えないんだよ」

息子は納得しない。ぼくを睨みつける。あの女はなんだ。へんな女を引っぱってきて、ぼくのだいじなものを捨てようとする。彼は唇を白くなるまで噛みしめている。

息子が彼女を恨み出せば困る。この先、何とかうまくつきあってもらわないと困る。

母が登ってきた。階段をあがりきらないうちから顔をのぞかせた。歯を突き出し、唇の両わきに唾をためている。

「なにかあったのかね」

「涼子が虫が嫌いでね」

「孝、虫をだいじにしてたんだから、ここへ来るときも、忘れず持ってきたんだから」

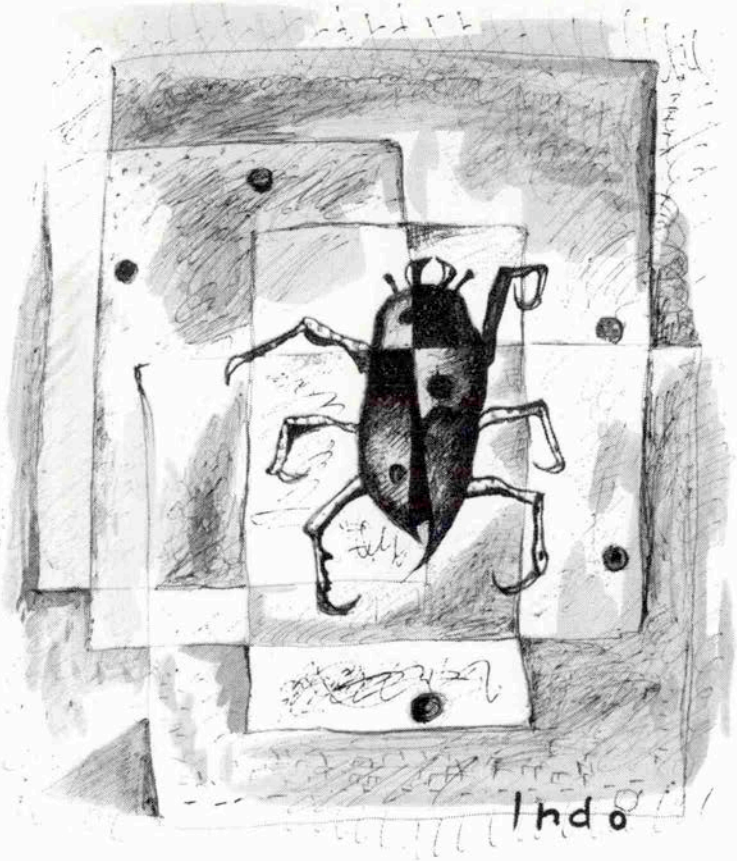
「虫恐怖症だよ、斑点が出るくらいだから」

母は息子の頭をなぜる。ぼくはそれを払いのけたくなる。頬にまで手を這わしている。

「あの人にわからないよう、どこかに隠しておいたら」

母は息子の耳元でひそやかにつぶやく。息子の顔は輝く。かすかに笑う。小さく頷づいている。箱を取りあげ胸の中に抱き込もうとする。

ひそかに飼っていた虫を涼子が見つけたときのことを考えた。大声で叫びあげ、扉を開いて外へ逃げ出し、再び帰ってこないだろう。それでもいたしかたがない。あれほど嫌いなものを飼っていたのだから。



ぼくはもう母の考えには従わない。ぼくはぼくの考えに従って行動する。いつまでぼくや息子にかかわろうとするのか。

「さあ、その箱をかしてごらん」

息子は両手で箱を囲い込む。ぼくはそれを払おうと両手を握る。熱い、力がこもっている。ぼくは力いっぱい引きはがし、箱を奪いとる。息子は倒れて椅子の角で頭をうった。息子は泣かなかった。ぼくの動作をじっと見ていた。一匹の虫を取りあげ、彼の目の前でつぶしてみせた。また一匹、また一匹、何匹か殺した。息子は手を組みあわせてそれを見ていた。

子どもから母を奪ったことに比べればたいしたことではない。一度進み出した方向は、どこまでも進むしかない。ぼくは何十匹と殺した。手が虫の血で褐色に染った。

虫はわずかになった。息子は泣きたいのを我慢している。顔も手も眼さえ動かさず、ぼくの手を見続ける。

「ひどいことや」

母が言う。

最後の一匹になった。ぼくは力をこめてそれを殺す。腹が半分に割れ、臓物が美しい紫色に光る。部屋全体がその色で染めあげられる。

「だいじにしてたのに」

母は泣く。

「だいじなものはたくさんあるさ」

ぼくが言う。ぼくは今、自分の大切なものを守るため、息子の大事なものを殺したのだ。いたしかたない、ぼくは自分を殺すことなどやめたのだ。母のように自分の子どもに殺されたくはない。

「ぼくにも、まだだいじなものがいっぱいあるさ」

息子は唇を噛むことをやめない。噴きあがってくる怒りを押えつけている。

「しゃない。おとうさんがおばちゃん好きやったらしゃない」

「そうや、おばちゃんが好きやからしかたがない」

「おばちゃん」

息子は階段のところへ走っていって叫ぶ。

「おとうさん、虫全部殺してしまったで」

「そうか、よっしゃ、ごめんよ」

息子は下へ降りていく。音が鳴る。母とぼくは黙ったままそれを聞く。

ぼくは白いボールを握って投げようとする。息子はだらんと手を下げたままだ。

「こんどは強いたま」

ぼくの額に汗が滲んでいる。いつも息子に救われた。いつかそのおかえしがくる。ぼくが母にするように、彼もまたぼくに何かをする。それが何だって受けなければならない。どんな暴投であったとしても。だがその覚悟はまだできていない。

四月といえども正午の陽射しは強い。アスファルトや白い外国風の壁に反射した陽がこの小さな公園へ集まってくる。

山なりのボールを投げるとそれが蒼い空で爽々しく照り映える。息子はそれを興味なさそうに受けとめると、みかけよりも強い速さで返してくる。掌が痛い。グローブから指をはずし、痛い痛いといってそれをふる。息子は声を出してゆかいそうに笑う。どうしてそんなに強い玉をぶつけてくるのか。まるで、情念を乗せた球みたいに。

ぼくの球はまた山なりだ。息子はそれを受けとると、前へ前へと歩いてくる。

「そのへんから投げろ」

息子は黙っている。どんどん近づいてくる。そこからは危険地帯だ。ぼくは野球はうまくない。そこから力いっぱい投げられればいくら子どもの球とはいえ受けることは不可能なことだ。眼にでもあたればたいへんなことだ。

ぼくは後ずさりしようとする。その瞬間、速い球はぼ

くめがけてうなりをあげてきた。ぼくは身をかがめた。球は肩をかすって、後のフェンスに直接はねかえった。大きな音が鳴った。肩をかすっただけなのにひりひりと痛んだ。刃物で切られたような痛みだ。ぼくは母のみせた新聞記事を思い出した。刃物を持った子どもが笑いながら襲ってくる姿だった。ぼくはそれを打ち払った。たいしたことではない、たかがボールがあたっただけだと言い聞かせた。へたくそ、へたくそ、息子は手を打って笑っている。声が公園中に拡がっていく。

ボールを拾うとこんどは強い球を投げた。ボールは息子の頭上を遠く離れ、金網にぶつかってはね、アスファルトの道路の上を転がった。息子は不思議そうな顔付でそれを眺めていた。

球のむこうに自分の家が見えた。陽の中にくっきり白い壁が浮いている。まわりの雑草をはじいて輪郭をきわだたせている。こんな家を見たことがなかった。正午の明るさに照らされた家はぼくにはまったくそぐわないような気がした。

家の前で涼子と近所の奥さんが立っていた。

「おばちゃん、ボール拾って」

息子が叫んだ。涼子はゆるくなったボールを止めて、ぼくが取りに行くのを待っていた。

「あなたのお子さんではないんですか」

奥さんが言った。

「そうです」
涼子が言った。
「再婚ですの、お若いのに」
「ええ」
「たいへんですわね」
奥さんは涼子とぼくの顔を何度もまじまじと見た。球を受け取るとまた公園の方へ向かった。涼子が後ろからついてきた。
「みんなばれたわよ。隣りの奥さんにも、その隣りの奥さんにも」
「やっぱりママと呼ばせなきゃね」
「隠しておきたかったのにね」
「隠しておくためじゃないさ」
「へえ、家を変ったのも、そのためじゃないの」
隠しておけるものなら隠しておきたい。そう思ったことは確かだ。おかあさんがいなくなってかわいそう。べつのおかあさんに育てられてかわいそう。そういう観念を息子に流されることを怖れたことは確かだ。でも、それは一種のカモフラージュにすぎない。涼子に尋ねられたときの自己弁護だ。自分の奥底にある後ろめたさ、息子への罪意識、それを払拭できてはいない。「おかあさんも、再婚したらよかったんだ」ぼくがいつか母に言ったことがある。そのときの母の爛々と輝く眼、うち震える唇、確信に満ちた声皺までざわめいているような緊張を思い出す。
「おまえにはわからないんだ。それがどれだけお前をいじけさせ、傷つけ、苦しめるか」
未来や仮定への確信を流されるほど危険なことはない。未来の中へ過去が根づく。不安の中へくっきり砦がつくられてしまう。
涼子と暮すことを考え始めてから何度かこの母の顔と言葉を思い出した。そして、また、いまも思い出す。
はやく捨て去ることだ。こんな古い、じめじめした考えからおさらばすることだ。そう思いながら、その頑固さにたじろいでしまう。
「何をそんなに怖れているのよ」
「別に隠したいわけじゃないさ」
「離婚しなければよかった。そう思ってるのね。このへなちょこ野郎。できれば洋子さんとよりをもどしたいなんて考えちゃいないだろうね。」
「ばかなこと言うな」
ぼくはどなった。でも、その言葉に力がなかった。自分でもそれがよくわかった。
「へえ、おこった、おこった」
涼子は手をたたいて笑った。
「早く、ボール投げてよ」
息子はグローブをたたいた。ぼくは走って公園へ入った。球を力いっぱい投げた。息子はなんなくそれを受けた。
「おばちゃんもする」
息子がどなった。
「ママと言ったらどうかな」
息子は一瞬とまどった。
「そう言うって決めたんじゃないのかい」
「ああ、ママもする」
アクセントがぎこちなく、強い抵抗感をようやくはねのけたという感じだった。
「ママはだめ」涼子の声も少しうわずっていた。
「おかあさんもだめだったよ」
「そう、じゃ、おんなじだ」
ぼくたちはまた何度か球の受け渡しをした。
「さあ、はやく昼ごはん食べて、おばあちゃんの家へ行きましょう」
「やっぱり、おばあちゃんと別々の家に住むの」
「そうよ、孝君はいやだろうけどね」
「しかたないよ。家の中に女の人がふたりもいたらややこしくてしかたがないよね」
息子が言った。
（つづく）

□第三回

神戸文学賞
神戸女流文学賞 作品募集

小社は昭和五十一年創刊15周年記念として神戸文学賞および神戸女流文学賞を創設いたしました。有為の新人に新しく道を開くとともに、西日本における文学活動のいっそうの発展のために微力を尽したいと願っております。第一回神戸文学賞は田靡新「島之内ブルース」、同女流文学賞は小倉弘子「ペットの背景」に、また、第二回神戸文学賞は奥野忠昭「姥捨て」、吉峰正人「生活」の二作品（同女流文学賞は該当作なし）と決まりました。ここに第三回文学賞を公募するにあたり、多数の意欲的御投稿をお願いするとともに清新かつ強力な作品の出現を期待する次第であります。

〈募集要項〉

一、神戸文学賞は男性作品、神戸女流文学賞は女性作品とし、いずれも小説で、共に西日本在住者に限ります。

一、応募作品は未発表原稿、または締切以前、一年未満に発行の同人誌に掲載したものに限ります。

一、原稿枚数は四百字詰百枚前後。

一、原稿には住所、本名、年齢、職業、略歴を明記し、四百字程度の作品主題（創作主旨）をつけて下さい。

一、締切りは九月一五日（当日消印有効）

☆なお、選考は本誌が依嘱した選考委員によって行います。

一、入選発表は本誌昭和五十四年新年号誌上。同号より作品を掲載します。

一、原稿の返却、選考経過などに関する問い合わせには応じかねます。

一、入選作品の著作権は本誌に属します。

一、入選作品各一篇には副賞として賞金二拾万円が贈られます。

一、原稿の送り先、お問い合わせは、神戸市生田区東町一一三の一　大神ビル七階　月刊神戸っ子「神戸文学賞係」まで。電話〇七八―三三一―二二四六

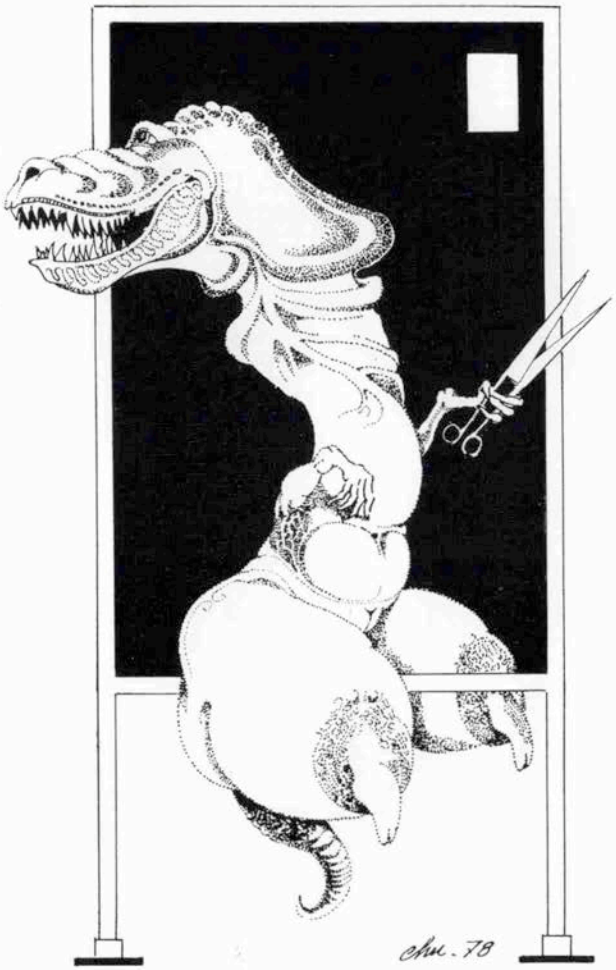
主催／月刊神戸っ子

□第2回神戸文学賞受賞作

生活

〈第七回〉

吉峰 正人
絵・榎 忠



「ほんとうにどうしたのよ。おかしな人ね。他に誰も見ていないじゃない。恥ずかしがることなんかないのに」言いながらシビンを押しつけてくる。ガラスの冷たさが睾丸を怯えさせる。ハッとするとまた尿意が激しくなる。こらえるとまた一つ下腹にしこりが増える。

「なんと言われても出ないものは出ない。いや、途中まできている。しかし、この格好が邪魔をしている。君だって、立ってやれと言われてもできるものではないだろう。このままではぼくは膀胱破裂で死んでしまうぞ。誘拐犯どころか、君は殺人犯になるぞ」

「またダダを言うのね。相変わらずね。でももうだまされない。出るまで気長く待ちましょう。出しちゃいけないって言っているわけではなし。そうしていれば破裂する前になんとかなるわよ。きっと」

「ふざけるな！　魂胆はわかっている。このような恥ずかしい思いをさせて、それを種にぼくをあやつるつもりだろう。ここに縛りつけておく気だろう。そんなことはさせない。おまえの言うままにはならない。絶対に出さ

ないぞ」
「そんなに向きにならなくてもいいのに。出しても出さなくても、あなたはそこにそうしているのよ。ほら」鏡台を指さす。
「君が無理にそうしたのだ。これは暴力だ」
「これは生活です。今更愚痴る気はないけれど、私たちにとって大切なのはこれからですものね」
「わかったよ。君の言っていることはよくわかった。だからぼくにも確かめさせてくれ。そして納得がいけば今までのことは詫びて、これからの君とのことを真剣に考えてみる。ほんとうのことが知りたいだけなんだ」
「下げましょうか？　それともうしばらく頑張ってみますか？」
「君はぼくの言っていることに答えていない。卑怯だ。いや、君だってほんとうのところはわかっていないのだろう」
「下げましょうね」女はシビンをはずす。ペニスをしまう。となると急に心細くなってくる。今にも出そうであることは事実である。勢いよく流してしまえばどんなにすっきりすることだろう。
「まて！　下げろとは言っていない」と思わず言う。人間の生理というやつはなかなか正確に几帳面にできているものらしい。精神がそれを超越するということはなさそうである。越えようとすればするほど逆に越えられていく。しまい込まれたそれは一ケ所に落ちつかず、やたら緊張を下腹に伝えてくる。そのたびにしこりがポコポコ増えつづける。軽く息づくだけで、ゴルフボールのようなそれが腹をころがり締めつけてくる。小便がかたまってしまったのかもしれない。今に尻からころころとこころがり出てくるかもしれない。
「出ますか？」ファスナーに指をあて、女は尋ねる。
かと言って、騒がしい音をたててシビンをいっぱいにするわけにはいかない。まだ湯気のあがるそれを桶に、女はより強くロープを結び、執拗にぼくの膝を撫でつづけることだろう。そして、それらのことを証拠に、自分の今までの行為を正当化するにちがいない。
「いらない！　下げてくれ！」吐き捨てるように言う。と、またしこりが動く。
「じゃ、また言ってくださいね。決して遠慮なさらずに」
女はふたたび布団にもぐる。掛布をずらせてぼくの足元を包む。女の動きの一つ一つがぼくを苦しめる。いや、彼女だけでなく、自分の呼吸や気持ちの変化までが放尿を促す原因になる。どうしたことか、女に対する腹立ちや諸々の苛立ちが消えてしまっている。下腹のある一ケ所にかたまった小便のふくらみが、ぼくの全てを占領してしまったようである。オシッコがしたいと狂いはじめた鼓動の中で思う。
気がつくと下腹のかたまりは一本の太い筋肉の棒になっていた。それは一定のところでじっとしておらず、動きはじめた。腹から背筋へ、背骨の間を突き刺しながら移動し、首の後ろから眼の奥の細い通路をこじ開け、頭のてっぺんへとつきあがっていく。頭の上に蛇口をとりつければ、そこから簡単に放尿することができそうである。限界である。
そうなると勝手なもので、小便をしたからといって女を許したことになるとは限らない、この部屋に住むことを承知したわけではないと、そんなことを思いはじめる。こんな女のために、こんなにも苦しい思いをすることはない。それよりも小便を女の顔にひっかけてやればいい。文句は言うまい。言えるはずもない。そのように考えていくと正直なもので、それは頭のてっぺんから来た道を一気に引き返していく。〝シビンをくれ！〟　言おうとして、やめる。
このまま放尿したらどうなるだろうか？　最大の目的である、ロープを解かせるという可能性はむしろその方があるのではないか。濡れた股間を女は温かいタオルでせっせと拭くことだろう。汚れた畳を雑巾でこすり、その跡にナイロンでも敷いて、ぼくに不愉快な思いをさせ

まいとするだろう。ズボンやパンツはどうする？　そのまま乾くまで放っておくのか？　そんな情のないことはしないだろう。彼女は妻なのだから。

下着を替える時、どうなる？　ズボンだって脱げない。腰や手首に巻きついているロープはそのままだとしても、足首を結びつけているそれはどうしても解かなければならないだろう。その時、タイミングよく脚で女を引き寄せられないものだろうか。両方の太腿部で締めつければ悲鳴くらいはあげさせることができるだろう。〝ロープを解け！　そうでないと締め殺すぞ〟と脅かせば……それくらいのことで人を殺すことができるだろうか。殺してしまっては意味がない。誰にも知られず、この場はひっそりと解決しなければならない。余計な人がからんできたらますますわからなくなってしまう。自分を発見するまでなるべく騒ぎたてないことだ。

そうだ、子供を起こして脅迫してやろう。ぼくの唸り声では起きなかったが、母親の悲鳴であれば眼ざめるだろう。いくら彼女が不気味であろうと四歳の女の子に変わりはない。自分の持っている迫力にはまだ気づいていないだろう。〝見ろ！　母さんは死ぬぞ〟そう言えば、ぼくが代わりに何を望んでいるか、この子ならわかるだろう。ロープさえなくなればあとはこっちのものだ。

腹の力をゆるめる。どんなに拘束されていようと、ぼくの体であり、ぼく自身であることにちがいはない。ぼくの尿道に、女がおのれの卵管をテコとした排水ポンプを押し込んで小便をコントロールしているわけではない。放尿するという行為はいつだってぼくの側にある。ぼくの全てを支配することは誰にもできない。してもらいたくてもできないのである。

腹のしこりが一つずつ消えていく。三つめの硬いものがなくなった時、股間に生ぬるいしぼりきっていないタオルをあてがわれたような感じが広がる。場所や格好はどうあれ、小便するということは気分のいいものである。

冷たくなった濡れ雑巾をぶら下げているような感じに変わる。あまり気持ちのいいものではない。よし、これくらいでいいだろう、思いながらそれを止めようとする。が、止まらない。ダダもりである。放尿しているというあのすがすがしい感じはもう薄れているのに、そこはますます重くなっていく。雑巾五枚くらいの重さである。無理に止めることもないのだと思いなおす。その最中を女に見せつけてやるのもいいかもしれない。ぼくは体の力を全部ゆるめる。口元にだけわずかな筋力を残し、それを引きつらせながら、

「もうだめだ。出そうだ。頼む！」言い終わらないうちに、女はガバと起きあがる。便所に駆け込む。シビンをとり出す。布団をめくり、中腰になる。ファスナーに指をかける。そして、

「あら！」と小さく叫ぶ。その声に誘われ、ぼくものぞく。ファスナーを真中に、黒っぽいシミがヘソから両方の膝のあたりまで浮きあがってきている。尻もずぶ濡れ、畳も色を変えている。さあ、どうする？　どうしてくれるのだ！

「ごめんなさい。間にあわなかったのね」女はシビンを放りだし、ファスナーにあてていた指をひっこめる。ぼくの体にくくりつけていた布団をとりのぞき、

「よかった。これは濡れていないわ」と丸めて横におく。

「冷たいでしょう。着替えましょうね」女は立ちあがり、部屋の隅のタンスの前に飛んでいく。膝をついて坐り、ごそごそと中をかき混ぜる。ぼくに合う下着があるのか。女物で間に合わせるつもりか。いや、この際、なんでもいい。下着云々までいかないうちに事は急変する。着替えは帰ってからゆっくりすればいい。あそこにはぼくの体にぴったりの、好みの下着がある。

着替えをかかえ、女は膝で歩いて近づく。いよいよだ。ぼくは体をやたら硬直させ、構える。

「ほんとうに遠慮深い人なんだから」言いながら女はハサミをズボンの裾にあてがう。いつの間に用意したのか。どうするつもりなのか。ロープがかたくてほどけな

いのか。それにしてはあてがう位置が違う。

あっと声を出す間もなかった。洋服地を裁断するように、ハサミは裾から膝まで一気にすべっていく。膝から腰まで一直線。ベルトだって簡単にちょん切る。片方が終わればもう片脚。作りそこなったチャイナドレスのようにズボンは形を変える。女はファスナーの部分を両手で握り、力任せに引く。紐のとれたフンドシのようなものだ。つながっているところは一ケ所もない。尻の下からズボンはするりと抜ける。わざわざロープを解かなくてもそのままで着替えができるわけである。ズボンが終わればパンツだ。女はそれも器用に切り裂き、ぼくの下半身を丸裸にする。

睾丸がびよびよにふやけ、陰毛の間で小便が小さな粒になって光っている。全裸なら風呂にでも入っているような気分になって、こんなにも奇妙な恥ずかしさは感じないのかもしれない。下だけというのはどうも落ちつかない。服を着ている上がやりきれないのか、スッポンポンの下がおかしいのか、どちらにしてもそのままじっとしていることができない。自然と腹筋と太腿筋を縮め、その部分を隠そうとする。が、どうにもならない。筋肉は人知れぬところでわずかに動いただけである。隠れるどころか、出すものを出して心配事がなくなったせいか、それは急にはしゃぎはじめている。ただいま十五度。

湯を沸かし、タオルを濡らし、女は丁寧に拭く。少し長くなったそれをちょいとつまみ隅々まで何度もこする。構え、全身にためていた力はすでに抜けきっている。ぼくの力の源をハサミが切ってしまったのかもしれない。しかし、チャンスはまだある。スッポンポンをそのままにしておくはずはない。わざわざタンスをかき混ぜたではないか。新しい下着

をつける時どうするのか。思うとふたたび体が硬くなってくる。

女はその前後を確かめぼくの尻の下に敷く。はて、また奇妙なことをはじめたと思いながら力を入れる。緊張すると脚の裏の筋が踊る。それはパンツの形をしていない。やや変わった一枚の細長い布である。それを二つ折りにして尻の下に押し込んでくる。ふと、ぼくは理解する。そして愕然とする。理屈は先程の切り裂かれたズボンやパンツと同じことである。ハサミを入れた部分にペッチンボタンが縫いつけられている。ボタンを全部はずせば足を通さなくても着用できる仕組みになっている。広げて尻に敷き、はずした部分を寄せてきてボタンをかければパンツの出来あがりである。パジャマだって同じことだ。なんとしたたかなことか。こんなことは優秀な看護婦だって気がつかないだろう。

わけなく着替えがすまされる。ぼくの計画は見事に失敗である。問題にならない。一人勝手にポケットの中で武器を握りしめ、汗をかいていたようなものである。ぼくのそれを見破られたのか。いや彼女の策略が優れていたのである。女は今日までせっせとハサミを磨き、真新しいパンツやズボンを切り開いていたのであろう。昨日や今日考えついたことではなさそうだ。下半身でくりひろげられる女の一連の行為に、ぼくはすっかり見とれてしまっている。

「ぴったりだわ。よかった。あなたは肥えも痩せもしないから助かるわ」腰骨のあたりのボタンをかけあわせながら言う。

「これは洗って、また仕立てなおしますわ」切り裂いた衣類を丸める。

それにしてもなんとぴったり体に合うのか。下腹に心地よくそれははりついている。まるでぼくのものであるようだ。パジャマだって好みの色である。どうなっているのか。全てがうまくできすぎている。

「よく似合うわ」女はぼくをしみじみ見ながら嬉しそうに言う。

この部屋にはたえず何かの音がしている。その騒がしさにぼくは一晩中うなされていたようである。それはよく気をつけていないと聞きのがしてしまうほど弱いものかもしれない。しかし、途切れることがない。瞬間の百ホンよりも連続する一ホンの方が強く、恐ろしい。その一ホンで人を狂わせることだってできそうである。

音……カーテンが揺れ、何かとこすれあっている。この部屋には窓は一つしかない。それも小さなものである。窓には薄い縁色のカーテンが敷かれている。果して、そこに陽は射し込んでくるのだろうか。ほんのひととき、わずかな光を遮るだけなのに、何故あんなに激しく揺れるのか。いつの間にどこからやってきたのか、小さな虫が一匹飛んでいる。やたら壁や天井にぶつかる。虫は出口を探しているにちがいない。この部屋にそんなものがあるのだろうか。飛びあがり、ぶつかり、落ちる。出口が見つからないのであろう。どうしてもうまく飛べないのであろう。羽根をこすり、足をばたつかせ、悲しそうにチッチと泣く。気をとりなおして飛び、ぶつかり、落下。チッチ、助けてくれと泣いている。どうしてこんな部屋に迷い込んできたのかと責める前に、そんな方法ではここから逃げだすことができないと教えてやらなければならない。まわりのあらゆることに見向きもしない秒針の動き。何故そんなに急いでいるのか。人は動き、それによって脈はくや息づかいや血の流れが激しくなり、そのうちに食欲や性欲や征服欲が湧きあがってきて、泣いたり笑ったり怒ったりしていてこそ、正確に狂うことなく動いている価値があるというものだ。そんなにあわてて行くことはないのだ。ぼくのそれは昨夜の九時過ぎで止まったままではないか。ほら、あの虫だって、明け方から、いや、ずっと前からかもしれない、出口が見つからないとただ悲しそうに羽根をこするばかりではないか。

（つづく）